Child Science

子ども研究

《講演採録》

AI・子ども・創造する心
―人間社会を豊かにするAIと「子ども学」

講師：竹林洋一（静岡大学創造科学技術大学院特任教授 / みんなの認知症情報学会理事長）

はじめに

こんにちは。竹林洋一です。今日は「AI・子ども・創造する心」というタイトルでお話させていただきますが、「人間社会を豊かにするAIと子ども学」というサブタイトルをつけました。そのあたりの話を聞いていただきたいと思います。

簡単に自己紹介をいたします。私は東北大学を出まして、博士論文は「音響信号処理に関する研究」。デジタル信号処理の草分けをやりました。80年に東芝に入社して音声認識についての研究を続け、85年にMIT（マサチューセッツ工科大学）のメディアラボに留学しました。そこで、今日の話に出てくるアラン・ケイやマーヴィン・ミンスキー、パトリック・ウィンストンと出会いました。当時の所長はニコラス・ネグロポンテでした。帰国後は研究者として音声対話システム、ウェアラブル・コンピュータのファッションショウをやったりしました。2002年に静岡大学の情報学部に行き、子どもの発達の研究をしているなかで日本子ども学会とご縁ができました。2016年には、「長寿社会の子どもと情報学」をテーマに、子ども学会議の大会長も務めさせていただきました。そして、現在は認知症の仕事をやっています。

ダートマス会議に集まっていた天才たち

さて、本題に入ります。AIは、日本では人工知能と訳され、使われていますが、AI（Artificial Intelligence）は1956年のダートマス会議で誕生した言葉で、知能についての研究分野の総称です。

AIは大きく二つに分けられます。一つは実用的な人工知能。たとえば、人間の表層的な振る舞いをシミュレーションするロボットを研究する分野などです。もう一つは、人間の臨機応変な知能の探求と応用。たとえば、人間の複雑な思考をシミュレートして振る舞うロボットの研究などの分野です。

ダートマス会議には、多くの才能が集まっていました。会議の中心となっていたMITのAIラボの初代所長ミンスキーは、今のディープニューラルネットの大もととなる研究をしていました。AI分野のチューリング賞の最初の受賞者です。また、ジョン・マッカーシーは人工知能言語をつくって、LISP（List Processing Language）をやっていました。クロード・シャノンは情報理論、ウォーレン・マカロックは神経生理学。ノーベル経済学賞を取り、映画の「ビューティフル・マインド」にも出たジョン・ナッシュはゲーム理論。やはりノーベル経済学賞受賞者のハーバート・

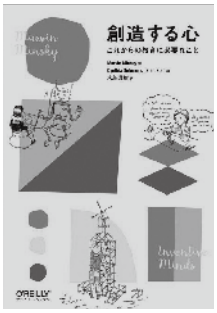
サイモンは意思決定、アーサー・サミュエルのチェッカーのプログラム開発、アレン・ニューウェルは認知心理学といった具合でした。現在のAIは深層学習が主流ですが、1950年代の草創期から1980年代までのAIは、もっと多様で挑戦的でした。

私がMITに留学した1985年は、日本では第5世代コンピュータをやっていた頃で、顔認識などはAIじゃないと言われていた時代です。記号とかシンボルとか論理をやるのがAIだとされていた時代でした。

『創造する心 ―これからの教育に必要なこと』

2019年に、ミンスキーが子どもの教育について綴ったエッセイ集がMIT Pressから出版され、その日本語訳の『創造する心 ―これからの教育に必要なこと』が2020年4月に出版されました。「数学を学ぶのはなぜ難しいか」「年齢別クラスの弊害」「一般教育を問う」「教育と心理学」といった6つのエッセイが収録されており、ミンスキーの盟友である超一流の学者による解説が添えられています。

この本で、私は冒頭に「日本語訳に寄せて」という一文を載せていますが、おすすめはパーソナルコンピュータの父で、ダイナブックを提唱したアラン・ケイが書いた「創造する心」です。彼の著作はなぜか大変少ないのですが、これは彼の最新の著作物という意味でも重要です。また、もう一つのおすすめは、安西祐一郎先生の「“創造する心”を創造する環境」という特別寄稿です。日本の教育に関するオピニオンリーダーである安西先生が「AI・子ども・創造する心」について記したもので、読み物としても大変おもしろいものです。



『創造する心 ―これからの教育に必要なこと』
Marvin Minsky著,
Cynthia Solomon編集
ほか,オライリージャパン,
2020

ミンスキーは、「Our Brains are computers made of meat」、私たちの脳は肉でできているコンピュータだと言っています。脳と体はつながっているのだ、と。ミンスキーは、共焦点顕微鏡の発明者でもありますが、その彼が人間の脳は400種類の構造の異なる部位から成っていて、チンパンジーとほとんど一緒だが、全然違うのだと言っているのです。

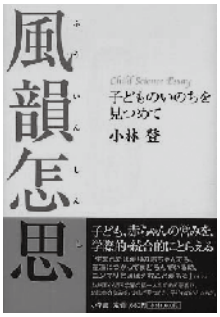
人間中心のAI・人間科学の研究者たち

図をご覧ください。人間中心のAIと人間科学・子ども学を発展させた研究者のつながり図です。マーヴィン・ミンスキー、ジャン・ピアジェ、シーモア・パパート、ハーバート・サイモン。図はさらに安西祐一郎先生、小林登先生にもつながっています。

AIの元祖はアラン・チューリングです。チューリングについては、チューリング・テストや万能チューリングマシンでご存じの方もおられるかと思いますが、1950年に書かれた論文『PSYCHOLOGY AND PHILOSOPHY（心理学と哲学）』の中で、「マシンは考えることができるか？」という問題提起をしています。デジタルコンピュータがなかった時代に、そんなことを書いたのですからすごいことです。

この論文で、チューリングは「できないこと」も考察しました。例えば、「マシンは意識を持つことができるか？」、「マシンは恋ができるのか？」「マシンは親切ができるのか？」「マシンはユーモアを言えるのか？　理解できるのか？」。いずれも今、話題になっ

図:人間中心のAIと人間科学・子ども学の発展と人脈ネットワーク



『風韻怎思―子どものいのちをみつめて』
小林登著,小学館,2005

AIの父・ミンスキーと竹林洋一氏

ている話ばかりです。これが、エニグマというドイツの暗号を解読したことでも有名なチューリングが、コンピュータ科学と AI の元祖と呼ばれるゆえんです。

チューリングはオックスフォード大学で海洋生物を研究している J.Z. ヤングや、1950 年頃にマイケル・ポランニーと「意識とは何か」という深い議論をするなど、学際的なコミュニティをつくっていました。そのコミュニティの一人、ヤングの 631 ページにも及ぶ著書『An Introduction to the Study of Man』の翻訳に関わったのが小林先生でした。邦題は『比較人間論』で、当時、医師会会長だった武見太郎先生が監訳者となっていますが、実質は小林先生が中心になって訳された本です。

小林先生の自伝的な著書『風韻怎思(ふういんしんし)』によると、先生は大学紛争の嵐が吹き荒れていた 1971 年に欧米の医学教育を視察して、人間を包括的・総合的にとらえる人間科学を日本の医学教育に取り入れたいと思われ、ヤングの著書を翻訳されたとのことです。私は小林先生が、この翻訳を通してチューリングやポランニーなどの影響も受け、人間を子どもというコンセプトから迫る「子ども学」という人間科学を始められたのではないかと思うのです。

AI とは何か？

AI の話に戻ります。AI は、ジョン・マッカーシーがたまたま人工知能（Artificial Intelligence）という名前をつけたのですが、本来は認知科学もゲーム理論も経済学も政治学も関係する、いろいろな分野と関係する研究分野です。人間の知能に関するもの、計算を使って認知というものを解明して、新しい価値を生み出すのが AI なのです。

ここで 4 歳と 3 歳の子どもたちの様子をうつした映像をお見せしましょう。

―【映像】―

おもちゃの車で遊ぶなかで、どちらが運転手になるかでいざこざが起こり、それを解決するまでの映像ですが、泣きまねをしたり、いろいろな言葉でなぐさめようとしたり、肩を組んで顔を見合わせたりと、たった 4 歳でも子どもの知能というのはすごいと思いませんか？

一般に、私たちは科学者や芸術家には敬意を払いますが、普通の人が日常生活でコモンセンス（常識）を使って臨機応変に考え、行動していることの偉大さには気づいていません。コンピュータは微分積分も因数分解も簡単にできますが、4 歳児ができるような日常的な問題の解決はできない。4 歳児の常識的能力は、何百万という知識やスキルの断片を学び組織化して、初めて身につくのです。『ミンスキー博士の脳の探検』の序文を読んでみます。

――私達は、人間以外の生物にはできない、すばらしい事を行っています。つまり、いつもの《思考路》がうまくいかない時は、自分自身で考え始めます。そして、この「内省的な思考」によって自分がどこで失敗したのかわかると、次には、新しく、かつ、もっと充実した思考路を自分で開拓することができるのです。ところが、私達は、自分の脳がこんなにすばらしいことをどのようにやってのけるのか、ほとんど理解していません。「想像力」はどんな役割を持つのでしょうか。「意識」は何から生まれるのでしょうか。「感情」「気持ち」、そして「アイデア」とは何でしょうか。私達はそもそもどのように物事を考えるのでしょう。

意識は、一瞬の間に、脳のいろんな場所でいろんなことを考えています。人の脳の中では、一つの日常的思考に対して、多くの心的活動が行われているのです。ミンスキーは、こういう多くの異なる心的活動をまとめて言及した言葉を「スーツケースワード」と呼ぼうと提案しました。人間の思考や心の話をするときには、「意識」や「感情」といった言葉のように、どうしてもスーツケースワードにならざるを得ないところがあるんですね。

小林登先生は、2002 年に Child Research Net のジャーナリストとの対談「未来のアトムは子どもを超えるのか？」のなかで、「人間の脳の中でいろいろなプログラムが動作している。意識は哲学や心理学、精神医学などの研究対象だが、人間の意識が『プログラムが動いていることを実感するメカニズム』とみなすと、人間に似た知能は AI のプログラムでシミュレート可

能と考えられる」とおっしゃっています。今、小林先生がここにおられたら議論したかったのですが、先生の著作物を読むことで対話ができると思っています。

人間社会を豊かにする研究と「ごちゃまぜ」

私は、情報学やIT（Information Technology）は、コンピュータの計算能力やデジタル技術をフルに活かして教育・ビジネス・医療・福祉・芸術などで価値を創造し、人間社会に貢献する分野だと考えています。ですから、医療福祉や地域共生と相互作用ができます。知能・感情や社会・経済を勉強した上でデータ化と情報化をすると、AIやいろいろな技術が開発できるのです。

私がMITで影響を受けたアラン・ケイはチューリング賞や京都賞を受けた科学者で「未来を予測する最良の方法はそれを発明することだ」という名言でも知られていますが、その彼が、1995年に私が副委員長を務めたヒューマンインターフェース関係の催しで来日したとき、「狩猟民族から農耕民族へ。競争や狩りをするんじゃなくて、技術を育成しなければいけない」と言っていました。技術を耕す農耕民族になれ、というのです。私はMIT から戻り、信号処理や音声認識の工学研究から転身し、1991年に人間中心の音声自由対話システムをつくりました。いくつも賞を取り、マスコミで紹介されて調子にのっていたんですが、ミンスキーに「なんだ、それって単なるおもちゃじゃないか。ただその範囲だけやっているんじゃないか」と言われました。そこで、静岡大学に移って幼児のコモンセンス、常識がどう獲得できるかという研究を始めました。

2005年から5年間は、石川さんや桐山さんと一緒に幼児教室をやり、その後、社会問題を解決しようということで認知症の研究を始めました。このまま認知症の問題を放っておくと、私たちの子孫が大変な困難に直面してしまうと思ったからです。私は、研究者が研究をするときには、社会的価値を生み出す応用をやったほうがいいと思っています。医師はもともと社会的価値を生み出す仕事ですが、一般の研究者は論文を書ければいいという姿勢になりがちです。

私は今、「みんなの認知症情報学会」で、認知症の本人と家族と地域の暮らしをアシストする研究をしています。技術も人も、あらゆる社会資源を使わなければなりません。理事の唐澤剛さんは事務次官待遇の地方創生総括官だった方ですが、「超高齢社会の未来は地域包括ケアシステムしかない。地方創生を進めるキーワードは、ごちゃまぜだ」とおっしゃっています。「超少子高齢社会を乗り切るには、大人も子どももみんな一緒に地域をつくる」のだと。ダイバーシティは相互作用や交流をしないと、価値を生みません。だから、「ごちゃまぜ」が自然、「ごちゃまぜ」が楽しい。「ごちゃまぜ」がイノベーションを生みます。

AIが普及した社会で最も大切になるのは、他人に共感する力を持つ人間です。いろんな人の関与が必要だということです。例えば愛着、アタッチメント。チンパンジーの愛着は固定的・不変ですが、人は愛着行動が発展する。お医者さんや看護師や介護をする人も愛着関係をつくれるんですね。こんなことも理論がある上でやるといいし、お年寄りの介護は小林先生がおっしゃっている「ケアリング」にも関係するんですね。

「みんなの認知症情報学会」とは

認知症について考えるというと、とかくサプライサイドで、研究者や教育者、お医者さんが中心になるんですが、当事者や家族を中心にする。こういう社会に向けて取り組んでいるのが「みんなの認知症情報学会」です。

おととし始まった自立共生支援AIプロジェクトは、生活環境をデザインしたり、地域づくりをやったり、自立共生支援の機器やシステムをつくるというものです。要は、私たちは頼りになる人がいることによって安心できるんですね。発達障害の子も、私たちが障害を持つようになっても、自分が信頼できるものがあれば落ち着く。こういう自立共生支援AIを、いろんな人が入りながらやっています。

もう一つ大きな流れとして、地域に根を張らなくてはいけないということで、石川県の加賀市と静岡大が共同事業を開始しました。加賀市は行政のデジタル化に熱心で、健康増進をやったり、障害の子も含めたりしながら、認知症についてもリテラシーを向上させている点で先進的です。また、静岡大学に「ケア情報学研究所」をつくりました。時限研究所ですが、その研究所のサテライトを加賀市に置こうとしています。

加賀市と静岡大共同事業

認知症ケアでAI活用

AIを活用した加賀市と静大の共同事業を伝える新聞記事（：新聞／2020年2月11日）

おもしろい話を、もう一つ。浜松に天然芝のグラウンド・ゴルフ場があるんですが、そこに行くと、みんな元気がよくなるんです。わざとアンジュレーションをつけ、難しくなるように設計してあるんです。これが健康増進につながり、慢性痛や、いじめがなくなったり、心と体の痛みが和らぐんです。なぜ元気になるか、どのようにゲームを設計するのかという研究はとても面白い。新しい価値が創造できると思っています。

小林登先生の言葉

ここで、2010年に浜松で小林先生にインタビューさせていただいた時の先生の言葉を聞いていただきます。

――「子どもに関係する人がたくさんいるじゃないですか。学者もたくさんいるし、実践家もたくさんいる。保母さん、幼稚園の先生、学校の先生、みんなが一生懸命やっているのに、いろんな問題が次から次へと出てきて、ますます悪化していくようになっちゃっているわけですね。そのためには、関係している人がみんなで話し合わなければいけない。

例えば、僕の場合だと小児科だけで考えていたのではだめなんだよね。保母さんと一緒に小児科の先生が話し合う。そうすれば、保母さんにとっても、小児科の先生にとっても、役に立つ情報がたくさん出てくる。そういうことをみんなで考えて話し合って、英知を絞って、こうしたらいいという方法論を編み出さなければいけないと思うんですね。

ただ、話し合うときに基本となる理念として、論理的基盤といったらいいかな、そういうものとして「子ども学」というものがあったほうがいいんじゃないか。それは何かというと、子どもに関係するいろいろな学問を包括して、統合して、つまり、横につなぐとか、縦につなぐとか、いろんなつなぎ方で包括的にまとめて子どものことを考える人間科学のような子ども学というのをつくる必要があると思うんですね。それはまた、子どもが育っていくために、子どもによい環境をつくるためのデザイン、それを私はチャイルドケアリング・デザインと呼んでいるんですけれども、そのデザインのもとになるものも子ども学の発想でつくることができるんじゃないかと思っております。」

いかがでしたでしょうか。私は先生の熱い想いに心が揺り動かされるような感じがしました。子ども学に出会ったこと、そして小林先生といろいろと議論できたことを本当にラッキーだったと強く思っています。

終わりに

2020年に立ち上げた「静岡大学ケア情報学研究所」は、日本子ども学会理事でもある桐山伸也さんが所長を務め、沢井佳子常任理事も参画されていますが、この研究所の考え方は、専門や立場を超えて活動して、創造性を育む環境をつくって、誰もが生き生きと暮らせる健康長寿社会を実現したいということです。いろんな人が「ごちゃまぜ」になる環境があって、そこではAIやITが活用される。年寄りも子どもも一緒にやる。これのもとになったのは、「長寿社会の子どもと情報学」というテーマで開催した子ども学会議です。やってよかったと今、思います。ミンスキー先生も小林先生も、もうこの世にいらっしゃいませんが、お二人ならどう言うだろうかと考えると、次につながるような感じがします。

ちなみに、ミンスキーは「2001年宇宙の旅」や「スター・トレック」の技術監修をしたりしています。また、グーグルの共同創業者をスタンフォード大で指導したテリー・ウィノグラードもミンスキーの弟子です。SFが好きで、未来を考えることが好きで、未来を考えてから今をやるというところが大事で、社会問題を扱うというところも同じです。こういうすごいコミュニティ、創造する者を育む環境がいかに大事かいうことが、先にご紹介した『創造する心』の中に書かれています。ぜひ、お読みいただけたらと思います。

『ミンスキー博士の脳の探検』の最終章「自己」には、「人間の思考の豊かさは、数億年を経て獲得した「脳の遺伝的素質」と、何世紀もかけて多様な社会が創った「多様な文化の継承」、そして、多様な個人が経験を通して身に付ける何百万の知識の断片により発達する」と書かれています。子ども学とケア情報学をベースに、みんなが「ごちゃまぜ」で活動し、子ども、成人、高齢者を対象に、多様な「個性」をもつ個人が心豊かに暮らせる社会をつくろうではありませんか。

〈プロフィール〉
竹林洋一（たけばやし・よういち）
静岡大学創造科学技術大学院特任教授、みんなの認知症学会理事長、日本子ども学会理事。東北大学大学院博士課程修了後、東芝入社。MITメディアラボ滞在中に人工知能研究の巨人・ミンスキー博士の知遇を得る。東芝研究開発センター技監、静岡大学教授を経て現職。これまで音響信号処理、人工知能、音声対話システム、ナレッジマネジメント、医療情報システムの研究実用化に従事。

第11回「子ども学カフェ」の講演より
（2020年7月11日／on-lineによる講演会）

オンライン子ども学カフェのスクリーンショット

《トピックス》

精神疾患のある親と暮らす子どもたちを応援する

細尾ちあきさん ＆ **北野陽子**さん（NPO法人ぷるすあるは）

精神疾患のある親のもとで育つ子どもがいても、見て見ぬふりする大人ばかりで、心を開いて向き合う大人が誰もいない。そんな思いを抱いた看護師の細尾ちあきさんと精神科医の北野陽子さんは、家庭の中でさまざまな事情を抱えながらがんばっている子どもたちを、絵本やウェブサイトなどの情報コンテンツを通して応援する「ぷるすあるは」を設立しました。立ち上げは 2012 年、NPO 法人化されたのは 2015 年 6 月のことです。

（取材・文：日本子ども学会事務局長 木下 真）

活字とは違った紙芝居の反応

細尾さんと北野さんが「ぷるすあるは」を始めたきっかけは紙芝居作りでした。二人がさいたま市こころの健康センターで同僚として働いていたときに、細尾さんが依存症の親をもつ子どもたちへの啓発プログラムのために紙芝居を利用することを思いつきます。当初は既存の教材を利用するつもりでしたが、インターネットでいくら検索しても、思うような教育ツールが見つかりません。「これほど探してないのなら、自分たちで作るしかない」と、細尾さんはそれまで習ったこともなかった絵を描き始めました。

絵には、依存症がどんな病気であるのかよりも、「心配なことがあれば周りの大人に話してもいいよ。君は一人じゃないんだよ」というメッセージを込めたと言います。出来上がったボードの絵を見せながら読み聞かせをすると、子どもたちは自分と同じような境遇の子どもの話に強い興味を示してくれました。

紙芝居は子どもたちのために作ったものでしたが、大人たちからも予期しなかった反応が返ってきました。「親が精神疾患の子どもたちは、こんな感じ方をしたり、こんなことを考えたりするのか」と、子どもの気持ちに関心が向いたというのです。活字で伝えようとした時には、起きなかった反応でした。

細尾さんの絵の才能に惹かれて

北野さんは、紙芝居づくりを通じて、細尾さんの絵の才能に気づかされることになります。子どもの描き方に魅力があって、構成といい、色使いといい、絵そのものに人に訴える力があると感じました。北野さんは細尾さんの才能を活かして啓発本を世に出したいと思うようになります。

そして、二人はさいたま市こころの健康センターを退職して、NPO 法人ぷるすあるはを立ち上げ、絵本の第一作である『ボクのせいかも…　―お母さんがうつ病になったの―』を完成させます。お話と絵は細尾さんが担当し、大人に向けた解説は北野さんが担当しました。

この最初の 1 冊の評判がよく、その後、「家族のこころの病気を子どもに伝える絵本シリーズ」「子どもの気持ちを知る絵本シリーズ」と続き、計 7 冊の絵本が制作されました。並行して、さまざまな教育ツールや啓発リーフレットやポスターの制作などへと活動は広がり、細尾さんの絵そのものも評判を生み、展覧会が開催されることにもなりました。

また、ぷるすあるはの活動の大きな柱として、絵本とともに情報サイトがあります。子どもたちや家族にとって有効な情報や細尾さんが絵画に込めた思いなどが、以下のホームページで詳しく紹介されています。
子ども情報ステーション https://kidsinfost.net

『ボクのせいかも…ーお母さんがうつ病になったのー』の挿絵。

■家族のこころの病気を子どもに伝える 絵本シリーズ ゆまに書房
①『ボクのせいかも… ーお母さんがうつ病になったのー』
②『お母さんどうしちゃったの… ー統合失調症になったの・前編ー』
③『お母さんは静養中 ー統合失調症になったの・後編ー』
④『ボクのことわすれちゃったの? ーお父さんはアルコール依存症ー』

■子どもの気持ちを知る絵本シリーズ ゆまに書房
『わたしのココロはわたしのもの ー不登校って言わないでー』
『ボクの冒険のはじまり ー家のケンカは悲しいけれど…ー』
『発達凸凹なボクの世界 ー感覚過敏を探検するー』

■子どもの自立を応援する人気本 学苑社
『生きる冒険地図』

■家族の子育てを応援する最新刊 ぷるすあるは（自主制作）
『ゆるっとこそだて応援ブック』

精神疾患をタブー視する社会

ところで、精神疾患のある親の子どもたちの問題は、どうして見過ごされやすいのでしょうか。いくつか要因が考えられますが、北野さんは、私たちの社会が、いまだに精神疾患をタブー視して、偏見をもっていることが大きな原因の一つであると言います。

ぷるすあるはで制作した絵本は、販売するだけではなく、全国の図書館や学校に献本も行っています。ある時、送り先の小学校の教頭先生から、「こんなものを贈られては困る」と一式送り返されてきたことがあるそうです。「親の精神疾患について書かれた本など、子どもには見せられない」というのが理由でした。

これはレアケースだそうですが、「精神の病は、語ってはいけないこと、他人に知られてはいけないこと」、そのような偏見は根深いものがあると言います。社会全体が話題にするのをタブー視していると、正しい知識は広がっていかず、対処の方法もわからなくなります。

子育て中の親たちのなかには、精神疾患を抱えながら子育てをしていることを相談できない人もいます。「弱音を吐くと子育ては無理だと思われるのではないか。子どもを取り上げられてしまうのではないか」という不安があるからです。そして、家族は周囲にSOSを出しにくく、学校の教師も踏み込んではならない家庭の事情として見て見ぬふりをしがちです。

母親が眠ってばかり、泣いてばかり、そして、ぶつぶつ独り言を言っている……。そんな事態に直面しても、子どもたちは何が起きているのかわからないままに、一人思い悩むことになります。

家族をケアする視点の大切さ

精神疾患に関するタブーとともに、子どもに関心が向かないもう一つの理由は、医療や福祉が対象とするのは障害や病気の当事者だけで、その家族を丸ごと見る視点が欠けているからだと考えられています。イギリスのように介護者支援法（ケアラー支援法）がある国では、家族への支援も行政施策の俎上に上り、介護や介助によって家族に生活に困難が生じていないか、フォローしようとする姿勢が存在します。

ぼくのこころが離れていく。

見えない包帯、見えますか?

しかし、日本の社会には、久しくそのような視点が欠落していました。日本の福祉では、家族による介護や介助は美徳としかとらえられてこなかったのです。家族に成り代わって社会が支えるという発想がないわけですから、もちろん子どもに対しても何のサポートもありません。

ようやく、近年になって「ヤングケアラー」と呼ばれる家族の介護をする18歳未満の子どもの存在に注目が集まるようになって、昨年埼玉県でケアラー支援条例が制定されたり、政府が中高生を対象とする全国規模のヤングケアラー調査を開始するなど、新たな動きも見られるようになりました。ぷるすあるはの事務所にも、ヤングケアラーから、「相談先を知りたい」「何か情報はないか」と問い合わせが寄せられるようになりました。

社会に新たな意識が広がるのはこれからだと思われますが、二人は自分たちの活動がこれまで世の中になかった大切な活動であることを、ますます意識するようになったと言います。

子ども目線で描かれた絵

細尾さんの絵は、大人の目線で描かれたあどけない子どもではなく、困難を抱えた子どもの目線で描かれた寂しさや強さを感じさせる絵として人気があります。描かれた子どもたちは独特のポーズや複雑な表情で見ている大人と対峙します。

「幼い頃の目線が自分の中に残っている」という細尾さんは、母親の精神が不安定になり、その症状に振り回された過去があります。母親の言動に一喜一憂したり、

大人へのまなざし。

右がミル、2つの眼で現実を、第3の眼で真実を見る。左がイル、帽子がこわい気持ちから守ってくれる。

母親が病気になったのは自分のせいではないかと悩んだり、そのような体験が絵に反映していると言います。

「毎日のように家事をこなし、困っていることもたくさんあったと思うのですが、大人に相談しようという発想はありませんでした。そもそも一体何と言って相談したらいいのか、言葉さえもっていない。精神疾患は目に見えませんから、それを言語化するのは、子どもにはすごくハードルが高いのです」（細尾さん）

頼れる大人が必要なのに、子どもの頃の細尾さんは、大人から手を差し伸べられても、その手を払うような子どもだったと言います。「家のことなど何も知らないくせに、上から目線で同情なんてするなよ」という反発心がありました。

細尾さんは、いま自分が大人になってやるべきなのは、きれいごとで寄り添うのではなく、子どもと対等な関係になるために真剣に向き合うことだと考えています。初めは嫌われても、子どもと本音で会話ができる大人になりたいと願っています。細尾さんの絵の中には、真一文字に口をしっかり閉じて、目を見開いて、大人の心を見通そうとするかのようなまなざしを向けてくる子どもがよく登場します。それが細尾さんにとっての困難を抱えて生きる子どものリアルな姿なのかもしれません。

見て見ぬふりする大人にならないで

ぷるすあるはで制作する絵本は、小中学校の図書室や保健室、図書館の児童書のコーナーなどに置いてあります。しかし、絵本とは言っても、もともと精神疾患について知識のない子どもたちが、自発的に読もうとするとは考えられません。これらの本は、親の病気について、理解が追いつかず、混乱している子どもたちに、周りの大人たちが病気のことや状況をわかりやすく伝えるためのものです。

そのことを踏まえて、絵本の後半部には、大人に向けて、絵本の使い方の解説や子どもと接する心構えが詳しく書かれています。そこには「できれば、家族や子どもと信頼関係の築けている大人が一緒に読むことをおすすめします」と記されています。

細尾さんと北野さんが絵本や教育ツールの普及によって目指しているのは、困難を抱える子どもたちと周囲の大人たちとの心をつなぐことです。細尾さんは、自身の子ども時代を振り返りながら、「子どもは敏感なので、大人の本性をすぐに見抜きます。見て見ぬふりする大人にはならないでほしい」と訴えます。

そして、絵本の大人に向けての解説では、子どもへの気遣いや配慮などの温かな言葉だけではなく、子どもの主体性を尊重することが強調されます。7冊の絵本すべての最後に「どんな状況の中にあっても、子どもがもつ乗り越える力、生き抜く力を信じることです」という言葉が添えられています。

左:細尾ちあきさん、右:北野陽子さん

〈プロフィール〉
細尾ちあき（ほそお・ちあき）
1974年兵庫県生まれ。看護師。精神科病院、精神科診療所を経て、2008年7月～2012年3月、さいたま市こころの健康センターに勤務。2012年4月よりNPO法人ぷるすあるはで活動開始。

北野陽子（きたの・ようこ）
1976年長崎県生まれ。医師、精神保健指定医。NPO法人ぷるすあるは代表。小児病院、精神科病院などを経て、2009年4月～2012年3月、さいたま市こころの健康センターに勤務。2012年4月よりNPO法人ぷるすあるはで活動開始。

■ NPO法人ぷるすあるは
〒338-0012　埼玉県さいたま市中央区大戸1-14-10-105
Tel 048-717-5639 ／ Fax 048-717-5639
E-mail:office@pulusualuha.or.jp